

諸説あり！「島原の乱」

2018年7月8日

横浜歴史研究会

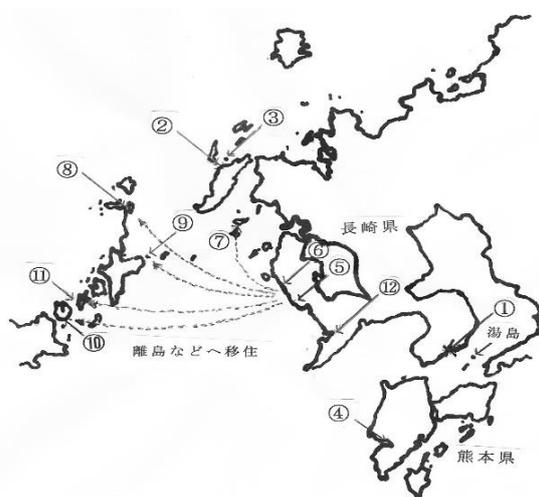
山本修司

I. はじめに

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が今年度世界文化遺産登録。

潜伏キリシタンは日本の伝統的宗教や一般社会と共生しながら信仰を続けた。

「キリシタン」とは禁教以前にキリスト教に改宗した人のことでポルトガル語由来。



2018年度世界遺産登録が内定した12構成資産

- ① 原城跡 ②③平戸の聖地と集落（既存の自然崇拝に重ねて山岳、島を崇拝）④天草の崎津集落（身の回りのものを信心具として代用）⑤外海の出津集落（聖画像などを秘匿して崇拝）⑥外海の大野集落（神社崇拝を重ねて神社を祈りの場）⑦黒島の集落 ⑧野崎島の集落跡 ⑨頭ヶ島の集落 ⑩久賀島の集落 ⑪奈留島の江上集落 ⑫大浦天主堂（新たな信仰の局面を迎えるきっかけとなった場所）

（以上 長崎県世界遺産登録推進課制作パンフレットより抜粋）

潜伏キリシタン発生のきっかけになった「島原の乱」（1637）の経緯や乱の総大将「天草四郎」の謎を追った。

II. 島原の乱勃発以前の状況（キリシタンの世紀）

1549（天文18）イエズス会創立者フランシスコ・ザビエル、鹿児島上陸。

1550（天文19）ザビエル、山口・大道寺で布教。平戸開港。

1562（永禄5）口之津港（原城近く）開港、大村純忠、キリスト教会堂を建て、翌年洗礼。大村藩6万人全員がキリシタンに強制的に改宗。

1568（永禄11）京都に南蛮寺（今の教会）建立。

1570（元亀1）ポルトガル船長崎来航。以後定期的に。主な輸入品は生糸、砂糖、香料、火縄銃、薬。輸出品は金、銀、銅、樟脳、陶器。

1578（天正6）大友宗麟（豊後藩主）洗礼。住人は改宗強制。

1579（天正7）イエズス会東インド管区巡察師ヴァリニャーノ神父、口之

津に來航。信者急増。口之津港が南蛮貿易の拠点に。鉄砲・火薬の流入とその製造。

1580（天正8）有馬晴信（日野江藩初代藩主）洗礼。家臣、仏僧も改宗強制。

1581（天正9）信者数15万人（大多数は先祖崇拜的な日本的民族宗教）。

1582（天正10）大村、大友、有馬のキリシタン大名、ローマに少年使節派遣。中浦ジュリアン（大村純忠）、原マルチノ（大村純忠）、千々石ミゲル（有馬晴信）伊東マンショ（大友宗麟、主席正使、東博で肖像画展示）。

1587（天正15）豊臣秀吉、伴天連（神父）追放令（キリシタンによる神仏破壊、奴隷貿易、植民地政策を見抜いた？）。有馬氏失脚。

1590（天正18）少年遣欧使節帰国。グーテンベルグ活版印刷機を持ち帰る。

1597（慶長2）2.5「日本26聖人の殉教」（日本人は20人）。

1600（慶長5）天草キリシタン大名・小西行長切腹拒否し斬首。

1609（慶長14）オランダに通商許可（三浦按針の進言も）。

1612（慶長17）切支丹禁教令。キリシタンの拷問、虐殺。有馬晴信刑死。松倉重政が島原領主。有馬氏配下の多くが帰農武士となる。島原・天草のキリシタン大名消滅。凶作も続き、「苛政」と「キリシタン迫害」。

1613（慶長18）伊達政宗、支倉常長をメキシコ、スペイン、ローマ派遣。

1614（慶長19）信者数36万人。キリシタン弾圧の大禁教令。

方広寺鐘名事件（「国家安康」「君臣豊楽」）で大坂冬の陣。翌年夏の陣。

1619（元和5）京都で60余人のキリシタン処刑。

1622（元和8）長崎で55人のキリシタン処刑。

1636（寛永13）長崎に出島を造成。貿易だけに関係するポルトガル人を移

し、他は追放。1641年～1859年はカトリック国（ポルトガル・スペイン）

の交易禁止し、布教活動ナシのオランダと交易（オランダ東インド会社）。

Ⅲ. 島原の乱（島原・天草の乱、島原・天草一揆）の経緯

・1636年（寛永13）8. 松倉・寺沢家の「若衆」集団脱走。天草へ。

・1637年（寛永14年）江戸に大雨・雷電・地震。阿蘇山噴火。

10. 24 湯島（談合島）の談合：島原と天草のキリシタンが談合。寺・神社を焼き払う決定。総大将天草四郎、島原に渡る。

10. 25 南有馬の百姓、島原・松倉家の代官林兵左衛門を殺害。乱勃発。松倉家領内の村々一斉蜂起し、島原城攻撃。一揆軍千人、島原城を守る岡本新

兵衛軍300。一揆軍苦戦。一方、天草・富岡城でも攻防戦。城代家老・三宅藤兵衛側には唐津から援軍1000人。四郎軍は総勢約1.5万人。一揆軍勝利。一揆軍は空城の原城（日野江城）に籠城。サクラ、日暮れが美しいので「春の城」「日暮れ城」。一揆軍は領主の倉庫を襲い、約5000石の米を略奪、原城に運ぶ。武器庫も襲い、数百丁の鉄砲、火薬を運ぶ。イモ、カキ、クリ、ミカンなども。当時領主松倉勝家は江戸滞在中。事件通報は11月9日江戸着。幕府は上使として板倉重昌と石谷十蔵貞清を派遣。一方、原城には3.7万人集合。12月3日天草四郎時貞入城。

11.27 幕府は一揆鎮定後の仕置人として家光の側近、六人衆（1633から5年間設置）筆頭で後の老中、**松平信綱**（武蔵国忍藩、川越藩主）派遣決定。

12.4 板倉重昌島原着。総数5万が原城包囲。

12.19 城攻め失敗（一揆側鉄砲の威力）。

・1638年（寛永15年）1.1 総攻撃。攻撃軍3800人戦死。総大将板倉重昌戦死。「**あらたまの年にまかせてさく花の名のみ残らばさきがけとしれ**」一揆軍、原城に籠城。幕府軍12万人。

・1.4 信綱、有馬着船。1.12 オランダ商船ディライプ号から艦砲射撃。

・2.3 山田右衛門作（島原前領主有馬氏家臣、南蛮絵師、700人の兵を持つ将、密通者）と幕府側の有馬五郎左衛門が密談。

・2.28 原城総攻撃、包囲戦80日。籠城軍3万7千。約4時間で陥落。四郎惨死し乱終息。乱に加わった全員処刑。うち女・子供・老人1万4千。さらし首約1万人。ただ一人の生存者は密通者の山田右衛門作。総攻撃の幕軍は、完全武装の13万（**宮本武蔵**もいた）。関ヶ原合戦（東西軍計15万人）に匹敵規模の殺戮戦。幕府軍の損害も甚大、総攻撃時の討死1,130人、手負い7,000。幕府が支出した戦費約40万両。各藩の自弁20万両。合わせて60万両（500億円程度）。

・3.1 原城完全破壊。

IV. 「島原の乱」勃発に関する諸説

① 「**百姓一揆説**」重税酷政。松倉重政の子勝家の代になると、圧政強化。米、麦以外にナスビ、キュウリの実の数までしらべ年貢。屋根税、いろり税、たみ税、子が生まれると頭税、葬式を出すにあな税、かべにつった棚に税。数年前から続いていた異常気象と飢饉。乱勃発の引き金は代官・林兵左衛門が百姓に殺されたことに始まる。

② 「**キリシタン一揆説**」キリシタン大名・有馬晴信や小西行長の遺臣が新領主

に反抗。「キリシタンの時代への回帰」を目指した「聖戦」。宗教戦であった。幕府は乱を、キリシタン一揆と断定。

③ 「豊臣家再起をかけた最後の戦い」豊臣浪人が秀吉遺族の天草四郎の下に集まって豊臣家の再興を目指した戦い。乱一段落後、関係記録（一級史料）は勝者側に都合の悪いものは破却。江戸時代中期～幕末の「天草軍記物」では時代思潮に迎合して、歪曲傾向に拍車。明治6年のキリスト教禁制の高札廃止以降、乱の真相を追究する研究が徐々に始まったが、本格的な研究は戦後しばらくしてからである。

・敬虔な信者による聖戦でもなく（ローマ法皇庁は乱犠牲者を、殉教者として認めていない）、複雑。食糧等を要求するものでもない。江戸幕府全体に立ち向かう反乱・一揆としては空前絶後。海禁政策（鎖国）になったキッカケ。

「巨大な雪崩も、それを引き起こす十分な条件が揃っていれば、雪上を走る兎のひと跳ねでも原因になりうる」岡田章雄『天草時貞』より

V. 島原の乱後のキリシタン

・1639（寛永16）（宣教師が潜入する可能性のある）ポルトガル船追放。幕府の対外政策、海禁（鎖国）の始まり。

・1641（寛永18）オランダ商館を長崎出島に移転。

・1854（安政1）日米和親条約。禁教令解禁。長崎に「大浦天主堂」建造。

・1865. 3. 17 15人の日本人が天主堂訪問。「ワレラノムネ（宗） アナタノムネト オナジ」。潜伏キリシタンの出現。続々出現し、再び弾圧強化。

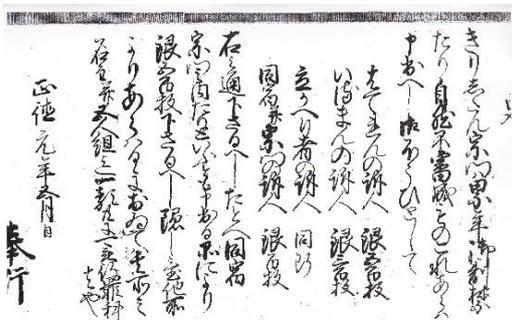
・1868（明治元年）神仏分離令

・1870（明治3）神道国教化を目指す大教宣布の詔。キリシタン大弾圧（長崎浦上キリシタン総逮捕。3300人が21藩に配流。浦上四番くずれ）。

・1871～1873（明治6）岩倉遣欧使節団、この弾圧が条約改正障害。

・1873（明治6）キリスト教禁制の高札廃止（259年ぶりに禁制廃止）。

・1945（昭和20）8. 9 長崎原爆投下で大浦天主堂壊滅。



旧友（K君）の実家宅（信州佐久）で発見された古文書

定

切支丹宗門は累年御禁制たり、自然不審なるものこれあらば申し出るべし、ご褒美として

バテレンの訴人 銀五百枚

イルマンの訴人 銀三百枚

立ち返り者の訴人 同断

同宿並びに宗門の訴人 銀百枚

右の通り下さるべし、たとへ同宿宗門の

内たりと伝ふとも申し出る品により銀五百枚下さるべし、隠し置き、他所よりあらはるる
においては、その所の名主並びに五人組迄、一類共に罪科行わるべきもの也

正徳元年五月日 奉行 (以上、旧友・A女の解説)

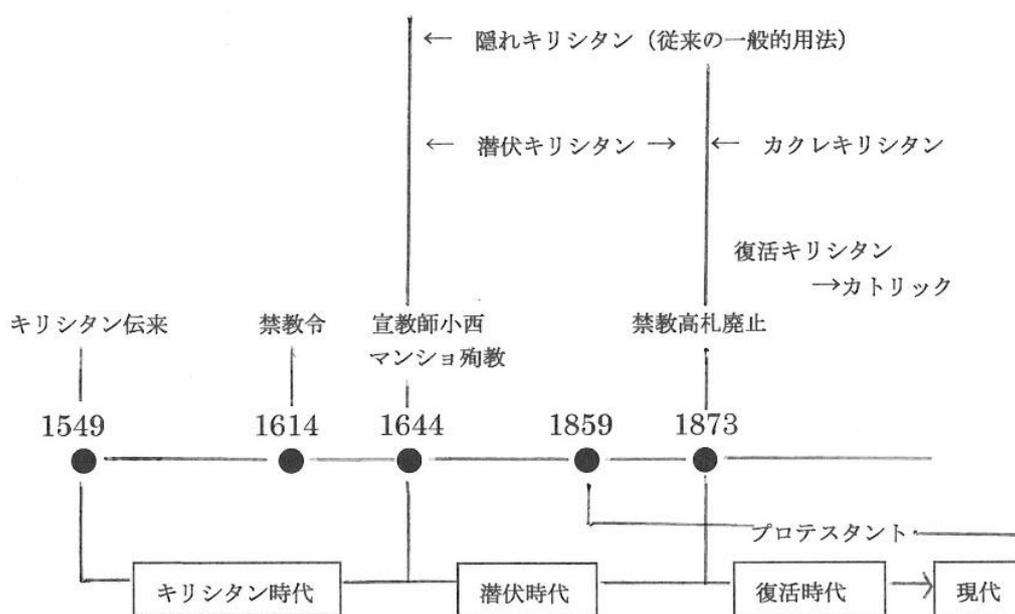
(現代語訳)キリスト教は従来から禁止されている。何か不審なものがあるなら通報せよ。
御褒美として、バテレン(神父)を訴えた者には銀500枚(金430両に相当)、イルマン
(修道士)を訴えた者には銀300枚、一旦、仏教に改宗した者で再びキリシタンにな
った者を訴えた者にも銀300枚、キリシタン並びにそれを匿った者を訴えた者には銀1
00枚をそれぞれ与える。右の通り通知する。たとえ親類縁者であっても訴えた者には
銀500枚を与える。キリシタンを匿っていることが他から露見した場合には、その名
主・五人組も連帯して親族共に責任を問われることになる。

正徳元年(1711)5月 奉行

VI. 発掘調査(原城跡)

キリシタンが「異教徒」を武力で強制した証拠(原城城壁・石段に神社仏閣を
破壊した石塔、墓石転用)。さらに台湾・中国・ベトナム等の陶磁器。一部の裕
福な大名しか使えない金箔瓦が出土、有馬氏が巨大な富を有していた証拠。富
の源泉は海の向こうにあった。口之津港は長崎開港前、東南アジア、中国との
交易玄関口だった(南蛮貿易の中心だった)。原城跡発掘の結果、最大規模の「ジ
ェノサイド」確認。(本丸入口付近の石垣に使った石の下から約300体のバラ
バラ人骨発掘)。「28日きりしたんころし候丸」『細川忠利自筆書状』。出土人
骨は成人男性のみならず女性や小児・幼児の人骨も多く、戦闘員だけでなく城
に立てこもった一揆衆全てが幕府軍の攻撃の対象であることが裏付けられた。
「全員虐殺」は**武士道**でのルール違反。幕府軍に**宮本武蔵**参加。

VII. 「潜伏キリシタン」と「カクレキリシタン」



日本におけるキリスト教歴史 (宮崎賢太郎著「潜伏キリシタンは何を信じていたのか」を改変)

「潜伏キリシタン」は最後の宣教師・小西マンショ殉教後の禁教期にひそかに信仰を続けた人々。「カクレキリシタン」は明治6年の禁教高札廃止後もカトリックに合流せずオラショ（祈祷）を唱え、土着信仰と融合。寺の檀家や神社の氏子となり、仏教、神道と「習合」でなく「並存」。御前様、神棚、仏壇、弘法大師をまつる壇が並ぶ。

宮崎賢太郎（元長崎純心大教授）説：日本人はキリスト教を日本風に変えた。「潜伏キリシタン」は禁教期のキリシタンが守った伝統的な神仏信仰の上にデウスという神も拝む民族宗教。神や仏も敬う。「カクレキリシタン」は潜伏時代と同じように寺社との関係を保ちつつ先祖伝来のキリシタンの神々（キリスト教の神ではない）も違和感なくあわせ拝んでいる。「禁教期変容論」（小説「神神の微笑」や「沈黙」の影響？）

中園成生（平戸市「島の館」学芸員）説：潜伏キリシタンは当時の宣教師の柔軟な布教方針で日本の神・仏にも敬意を払いつつその信仰形態を忠実に守り続けた。即ち、日本人が勝手に変えたのではない。「禁教期変容論の否定」。

VIII. 禁教期過酷状況下での布教

・短編小説「神神の微笑」：（芥川龍之介、1922、大正12「新小説」）ポルトガルから来た南蛮寺の宣教師とこの国の霊の一人との会話。「この国には山にも森にも家々の並んだ町にも不思議な力があり、自分の使命を妨げている。こ

の国に渡って来た孔子、孟子、荘子などの哲人たちや伝えた霊妙な文字、墨蹟でこの国は征服できなかつた。日本人の文字に変わっていった。印度からの仏教も本地垂迹の教に変わってしまった」「事によるとデウスもこの国の土人になるでしょう。支那や印度も変わったように西洋も変わる」「禁教期変容論」。

・小説「沈黙」：(遠藤周作の代表作) 島原の乱後、キリスト教を禁教し海禁(鎖国)した日本に来たポルトガル人神父の神と信仰の意義を命題。「命を捨てても信仰を守り通すべきなのか、命を守るためには、棄教もしかたないのか。神は『沈黙』したまま答えてくれない」。斬首、火あぶり、吊るし等の場面も。ノーベル賞候補。神父が踏絵を踏み棄教(転ぶ)する結末にカトリック教会から反発も。

・「沈黙」の映画化：篠田正浩監督。1971。出演：丹波哲郎、岩下志麻…リメイク版：2016。マーティン・スコセッシ監督。高松宮殿下記念世界文化賞受賞(2016年度)。2017日本公開。R指定(米国)。PG12指定(成人保護者同伴。日本)。衝撃的ラストシーン。

・澤田美喜記念館(旧友、K女の紹介。大磯町・隠れキリシタン資料館) 五島列島や天草地方などの、かくれキリシタンの遺品展示(映画「沈黙」撮影に貸し出した「踏絵」や、十字架が隠れている阿弥陀如来像、観音像、大黒天像、家康像、下半身切断の木彫マリア観音(原爆被害?)、7枚の「禁教高札」、天草四郎最後の図(部分)等々。

IX. 総大将・天草四郎に関する諸説

IX-1. 天草四郎は実在したか

・実在の根拠：①永青文庫の史料「牢者の覚(入牢者の記録)」「日帳(奉行日記)」に四郎親族の処刑についての記録。②久留米の商人・与四右衛門が船からおりて馬に乗る四郎に遭ったとする証言記録。③原城からの落人の証言記録。④四郎が原城で配った「四郎法度書」(城中に立てこもったものに対する教書)が永青文庫に残っている。⑤松平信綱の四郎生捕りを熊本藩主細川忠利に命じた書状発見(H19)。「四良をいけとりに」の文字(全員殲滅2日前)。⑥原城落城時、美濃大垣藩主が四郎を打ちとり生首をかかげた細川藩士・陣佐左衛門(じんのすけざえもん)を問いかけた記録「西村五兵衛門覚書写」(内閣文庫蔵)。⑦「早天(早朝)に四郎時貞がありし家に押し入りて、四郎が首をば細川が家臣陣佐左衛門討ち取りたり」「徳川実記」。

・非実在(または複数人いた)の根拠：①当時15~16歳とされ、大事件の指導者としては若すぎる。②四郎の出生が不明。父の小西浪人益田甚兵衛(ペイトロ)や母(マルタ)の正体不明。江戸中期の小説との混同が多い。『松井家先祖由来附』③四郎のあらわしたとされる幻術が疑問。「虚空より鳩を手招いて

手の内に卵を産ませ、その中から吉利支丹の経文をとりだす」「海上を陸地を渡るように歩く」「盲目の人にふれると目が見えるようになった」等々。奇蹟を行う「神の子」：『耶蘇宗門制禁大全』『耶蘇制罰記』『島原記録』④マルコス神父の予言が疑問。「25年後、16歳の天童が現れパライソ（天国）が実現する」に基づき四郎出現。『末鑑の書』『耶蘇天誅記』。（イエズス会の資料では未確認なので捏造？）⑤複数の四郎首：四郎討死（1638. 2. 28寛永15）。首は幕府側総大将の松平信綱に「十数人の四郎首が差し出された」『寛永平塞録』『原城紀軍』。戦いに参加した諸大名がそれぞれに首を出した？ 籠城中でも四郎は味方の前にあらわれず、目撃されたのは四郎らしき少年たちであった。多くの四郎の分身が同じ姿・恰好で各地に散っていったのは現実にあった『天草四郎の正体』。四郎首は松平信綱の政治決断で決定。⑥民衆の団結の目的で、キリストのようなカリスマとして天草四郎をたてた。松倉家、寺沢家の10歳代の若衆が集団脱走（1636）、天草で合流。これが四郎の分身か。マルコス予言もこのころ捏造？

IX-2. 秀頼・国松・真田幸村生存伝説

・大阪夏の陣で豊臣秀頼・国松父子と真田幸村（または息子の大助）とその一行は、大坂落城の際に、島津家の船で薩摩に逃げ延び、鹿児島県の谷山郷に隠棲。

① 京都地方に残った童歌（京・大坂の民衆は豊臣びいき）

「花のようなる秀頼さまを 鬼のようなる真田がつれて 退きも退いたよ加護島へ」『左衛門佐君伝記稿』（幸村の死から200年後）

② 英国商人リチャード・コックス（1566～1624）夏の陣5ヶ月後の日記「秀頼は薩摩で生きている」

③ 鹿児島県南九州市頰娃（えい）町に「幸村の墓」とされる山川石（貴重な石）墓石。墓の家紋は六文銭。頰娃町に「雪丸」（幸村？）の地名が現存。

④ 秀頼の首級は未確認（現代風にいえば秀頼は行方不明）。

「秀頼母子総ジテ三十余人、八日未ノ刻ニ自害アリ、秀頼、当年二十三歳」「櫓の内ハ残ラズ焼失セテ、秀頼公ノ御死骸見エ分ラズ」『大坂御陣覚書』。

⑤ 淀君ゆかりの嶋野（しぎの）弁天境内に埋葬されたとされる淀君と秀頼の骨壺を明治に入ってから大融寺に移転するために掘り起こしたところ、淀君の社の下からは骨壺が出たが、秀頼の方には何も埋められてなかった。

⑥ 旧日出藩主・木下家に伝わる「一子相伝」（現当主、第19代木下崇俊（た

かとし)氏によると、国松は大坂落城の際、真田大助らと四国路を薩摩に逃げ、国松は伊集院で庇護された。

- ⑦ 後、国松は日出藩主・木下延俊（三万石。北政所ねねの兄・木下家定の三男）を頼り日出城に寄寓。木下家の次男として入籍、縫殿助と命名。縫殿助は後に羽柴縫殿助延由を名乗り、立石藩主（五千石）。45歳没。
- ⑧ 立石の羽柴家菩提寺・長流寺に国松の位牌が現存。表は「江岸寺殿前掖庭月淵良照大居士」の法名。裏面に「木下縫殿助豊臣延由」。羽柴でなく、豊臣。
- ⑨ 国松の父、秀頼は薩摩・谷山で客分扱いをうけていたが、自刃（45歳）（薩摩木場家の一子相伝）。（伝）秀頼の墓が谷山にある。
- ⑩ また一説には、秀頼は薩摩を脱出、日出藩・木下家に迎えられ、木下家定の六男・木下出雲守宗連となった（木下家「一子相伝」）。
- ⑪ 秀頼こと宗連の薩摩の谷山での息子の1人が羽柴天四郎秀綱。「南海の美少年」天草四郎時貞である（木下家「一子相伝」）。
- ⑫ 島原の乱の軍資金（武器・弾薬・食糧）は略奪品だけでなく、「天草四郎の遺宝」。1847（弘化4）日本橋・薬屋の土蔵から小山田慶信（小西家遺臣、乱の残党。遺宝の守護役）の日記と埋蔵場所地図発見。今でも宝探し。
- ⑬ 秀吉の遺宝、多田銀山（兵庫県川辺郡）4億5千万両（80兆円）を守っていた和田二郎光盛の秘文書。「大坂落城ノ直後、真田幸村ノ家臣穴山小助ノ立会デ、埋蔵金ノ一部ヲ堀り出シ、九州薩摩ノ島津家ニ届ケタ」。

IX-3. 乱は豊臣家再起をかけた最後の戦い？

- ① 当時20万人以上の豊臣家恩顧の旧大名の浪人が全国に溢れていた。秀吉の孫・羽柴天四郎秀綱が決起したと知ったら大挙して参集したかもしれない。
- ② 乱の馬印（大将のありかを示す旗）に瓢箪（秀吉と同じ）。異説、997年、イスラム軍に占領されたスペインを救ったレコンキスタの若き指導者、聖ヤ



コブの持つ杖に瓢箪。（左、四郎旗。中、秀吉旗。右、聖ヤコブ像。いずれの画像もインターネットより）

《結論》

島原の乱及び天草四郎の実態は未だ歴史の深い闇の中にある。しかしこの凄まじい殺戮で終結した乱以降、秀吉恩顧の武将の消息は途絶え、キリスト教禁教下での海禁政策（鎖国*）が確立し、戦乱の無い徳川の時代が本格的に始まった重大な戦いであったのは事実。（*：「鎖国」は蘭学者、志筑忠雄「鎖国論」1801が初出。明治以降一般化。歴史学では「海禁政策」。2017.2.14公表の文科省次期学習指導要領改正案では小・中の教科書に「鎖国」⇒「幕府の対外政策」。長崎・対馬・薩摩・松前の四口を窓口として交易。他の東アジアでもこのような策を採用。）

主なる参考文献

- ・遠藤周作 沈黙 1981 新潮文庫。
- ・DVD「沈黙—サイレンス」 2016 KADOKAWA。
- ・神神の微笑 芥川龍之介 青空文庫（インターネット図書館）
- ・潜伏キリシタンは何を信じていたのか 宮崎賢太郎 2018 KADOKAWA
- ・かくれキリシタンの起源 信仰と信者の実相 中園成生 2018 弦書房
- ・かくれキリシタンとは何か 中園成生 2015 弦書房
- ・島原の乱 神田千里 キリシタン信仰と武装蜂起 2005 中央公論新社
- ・天草四郎と島原の乱 鶴田倉造 2008 熊本出版文化会館
- ・天草四郎 前川和彦 1984 島原決起の謎 日本文芸社